

主に伴われて

佐藤晶子

一、東日本大震災に直面して

夫の定年退職を機に、私は夫と共に岩手県一関市にある夫の実家に転居することになった。二〇一一年二月九日、それまで二〇年間暮らした横浜を後にして、池袋発の「けせんライナー」という夜行バスに乗った。翌朝バスを降りた時は、夜明け前だった。

粉雪が舞う中、タクシーに乗り換える為に、荷物を抱えて三〇分程歩かなくてはならなかった。義父は脳の血管障害の手術後、脚の麻痺が改善しなかったので、病院を出た後に地元の介護施設でお世話になっていた。その上、それより二年前に義母を天国に送った後だったので、夫の実家から車で迎えに来てくれる人は誰もいなかった。

家に到着して間もなく引越しのトラックが来ることになっていたので、私達は家具の設置に邪魔になるような物を移動させたり拭き掃除を手早く済ませた。その日は部屋中に山積みされた沢山の段ボール箱を優先順位を決めて、其々の定位置に分別して移動させた。そして取り敢えず寝る場所だけは確保した後で、少しずつ開封していった。

片付けが一段落してやっと以前と同じように日常生活が送れるようになった頃、私は日曜日の午前中に行われている主日礼拝に集いたいと思った。先ずは近くにある教会を電話帳で調べることにした。教会に電話で場所の確認をしてから、夫に運転をお願いし、この地

での礼拝を捧げることができた。二月末の礼拝のメッセージは旧約聖書のノアの箱舟の話からだったが、その時には二週間後に東日本大震災に遭遇するなどは想像できなかった。

息子はだいぶ前から一人暮らしをしていたが、私達が引越す折に娘はまだ短大生だったので、通学に便利なところのアパートを借り、成人の日に引越すことにしたので、大わらわだった。

私自身は一人暮らしの経験がないので、娘の生活と将来は心配だった。だが娘は、地方から一人出てきて同じ短大に通っている人は何人もいるからと言うので、私の不安は少し軽減した。生活が困難にならないようにと、課題が示された時には常にイエス様にしみつく程に祈り続ける日々だった。

短大の卒業式に娘は聖歌隊の一員として奉仕することになっていて、大好きな仲間達と一緒に讃美歌を歌えるのを楽しみにしていた。ところが、震災翌日の卒業式は急遽中止になり、後日改めて個々に学校に卒業証書を貰いに行くことになったと涙ながらに訴えてきた。聖歌隊の衣装も自分の手元にあつて、卒業後にクリーニングして学校に返すことになっていたらしいが、聖歌隊の仲間達と再び会えなくなってしまうことがショックだったらしい。そのような人は、娘の他にもたくさんいるのではないかと思つたが、娘の苦言に

返す言葉を失った私は母親としてとても情けなかった。

一〇一二年三月二一日、穏やかな昼下がりに、今まで感じたことのない地響きとともに訪れた突然の大きな地震と長く続く揺れ。リビングに居た私は、あまりの強い揺れにどこに逃げれば良いのか、外に出るには玄関まで数メートル走ればいいだけなのに、窓のサッシの上に足が乗ったまま、動けなかった。

夫は庭に出ていたのですが、私も外に出たいと思っていたが、靴がないので裸足のまま地面に下りることが出来なかった。揺れが長く続いていたので、家の中にいたら危ないのではないかとも思った。両方の思いが同時に来たので、私は自分をコントロールできなくなり、恐怖で震えていた。

テレビのスイッチが入らないので停電したと思っていると水道も止まって水も飲めなくなり、夕食の支度もできなくなった。ラジオから流れてくる音声を聞いても、何が起こったのかわからないままだった。今までいかに無意識でライフラインを使っていたのかを思い知らされた。

不便な生活の中で、夫が家の隅から発電機を探し出してくれたので、切れて繋がらなくなった携帯電話の充電がやっとできた。遠方に住む家族や友人達が心配してたくさんメッセージを送ってくれていたのがわかって、とても励まされた。

以前から不思議だと感じていた新約聖書の使徒言行録一六章の記述を思い出した。

投獄されていたパウロとシラスが真夜中に賛美し祈っていると突然、大地震が起こり囚人達の鎖が外れてしまった時に、看守は責任を取って自殺しようとしていた。しかしパウロは、逃げないからと諭したという箇所だ。

三日後、やつと電気が復旧して電話も通じるようになってホッとしたが、テレビに映った津波の凄さと原発事故の大きさに再び恐怖から逃れられなくなってしまう。家が山の中にあるせいか地上波が届かず、義父母は衛星放送を観ていたもので、私は深夜に放送されていた特別番組で世界各国の原子力発電所の様子をずっと毎日のように連続して観ていた。勿論その中にはロシアのチェルノブイリ原発の現在の様子も映し出されて解説がなされていた。事故から随分年月が経過しているのにと驚き、新たな恐怖が重なり、福島の人達への思いもこの時にいろいろな面で再認識させられ、自分の立ち位置を考えざるを得なくなった。

そのような中で、体調を崩しながらも集えるようになった日本基督教団千厩教会の人達のおかげで、なんとか自分を取り戻して歩み続けられるようになったので、イエス様に

感謝して教会員の一人としてこの地に根を下すことになった。

横浜に住んでいた頃に習っていたオカリナを使って、月に一回の伝道礼拝で賛美をさせていただけることになり、私はどんどん元氣を取り戻していった。その折々に感じる思いを証ししながら、良い交わりもできるようになって、生活の苦しみから徐々に解放され、イエス様を通して神様に深い感謝の思いを共に祈る日々になった。苦しみの中で神様はずっと救いの手を差し伸べてくださっていたのだと思えるようになり、すばらしい喜びに変えられた。

それと同時に、震災以来、危険で入れなくなってしまった教会堂を新しく建てる歩みが始まっていた。大変な道だと思ったが、後になって振り返ると、イエス様と共に歩む日々にはたくさん恵みが用意されていて、未来への希望に向かって歩み始める為の備えだったのだと再認識させられた。

気仙沼、陸前高田、遠くは石巻から避難して来た被災者達が住む住宅を一関市も負担していたので、千厩にも多くの被災者が住んでいた。それと共に、諸外国からの震災復興支援のボランティアのベースとなる住宅も教会の近くにできて、私達は沢山のボランティア

達と交わりの時を持つことができるようになった。大変な時だったが、お互いに重荷をイエス様の下に下ろしながらの交流だったので、心細かった教会の中だけの交わりが、一挙に厚みを増して、心も熱くなり、素敵な交流の場に変化していった。願いが叶って千厩教会は、日本全国から会堂に入り切れない程たくさん兄弟姉妹達が祝福に集まってくださり、新会堂での献堂式を無事に終えることができた。

海外の教会からの支援もたくさんあり、クリスマスやイースターにはボランティアの人達も迎えて、ドイツ、アメリカ、韓国、フィリピンの兄弟姉妹と共に五ヶ国語での礼拝、讚美をするという恵みを共有できた。私達にとって新しいことばかりの連続で戸惑うことも多かったが、神様はその都度、足りない私達を顧みてくださり、思いも寄らぬ溢れる恵みで満たしてくださり、一人一人を祝福してくださった。

代わる代わる訪れてくれていたボランティアの方々とも、自国の生活の為に少しずつ別れを告げることになり、こちらに住む私達はたくさん感謝と共に、それと同じくらいの寂しさをもつての別れは、とても辛い。何かの機会に再会出来たらとの希望を抱きながら、お世話になった多くの人たちを送り出す日々になっている。

## 二、聖書との出会い

小学校六年生の時に近くの書店で、母は妹と私のために五〇巻から成る少年少女向けに書かれた世界文学全集を買ってくれた。その中には含まれていなかったが、母は聖書が一番のベストセラーだと教えてくれた。そのことはずっと忘れていたけれども、二段ベットの横に設置された細長い本棚にぎっしり詰められた文学全集を、日曜日の朝早く起きて夢中で読んでいた記憶がある。

それまでの私には読書の習慣もなく、学校から帰ると友達と夕方遅くまで外で遊びふけていた。しかし、小説の面白さに目が開かれてからは、学校の図書室からも時々面白そうな本を探して借りて来るようになっていた。

同時期には、同じクラスの友人と土曜日の午後、英会話に通わせてくれていたので、中学・高校時代には英語の授業が楽しみで、それだけはきっちり予習復習をしてテストの成績も良かった。進路に関して悩む事もなく、大学は英文科を選び、学びを進めようと思っていた。母は看護婦だったので、私に同じ道を勧めたが私は迷わなかったし、父は私の希望を優先してくれたので、その通りに進学した。



英文学史の先生からは、欧米の文化にキリスト教が底流にあるからと、聖書を読むように勧められていたが、必修ではなかったため、私にも関心がなかったため、卒業するまで遂に聖書を読むことはなかったし、買うこともしなかった。今振り返ってみると、卒論を書く際にも聖書は必要な参考書だから、読んでおけば良かったと後悔している。

大学を無事に卒業して就職して成人にはなっていたけれど、それからの自分がどこへ向かっているのか目標を設定できずに悶々とする日が続き、自分の自信のなさや友人達との付き合いの中で、情緒不安定になることが多くなり、職場でも家でも人間関係がしつくりいかずに、とうとう自暴自棄までになってしまい、夜遅くまであてもなくフラフラする日が続いた。両親にも心配や迷惑をかけることが多くなって、心身ともに荒れ果てていた。

私の姿を見かねた母はある日、母の親しい友人から詩篇付きの新約聖書を受け取って、私の机の引き出しにそっと入れておいてくれた。そして、「少しづつでいいから毎日読みなさいって、あなたに貸してくれたのよ」と言った。その時に初めて、母の友人のお母様が熱心なクリスチャンであると、母から教えられた。それから、毎日寝る前の一時間位を聖書を読む時間にして、読み終わったら電気を消して直ぐに寝る生活を続けていた。

### 三、初めての礼拝

しばらくして、聖書をくださった人と手紙のやり取りをするようになり、聖書のわからないところを聞いていくうちに、教会の話になって、私は是非行ってみたくて訪ねてみた。受付の方々はとても優しく接してくださり、初めてで何も分からない私を上手に誘導してくださった。この時の印象は今でも忘れない。

歌を歌うのはとても好きだが、讃美歌の歌うのは初めてで、こういう歌があるということに驚き、ある日の礼拝の中で歌われた讃美歌に釘づけになってしまったのだ。

クリスマス・イヴには、キャロリングにも参加させていただき、自宅の玄関前にもクリスマスの讃美歌を歌いに来てくださり、牧師にお祈りもしていただいたのに、私は両親に紹介するのを忘れて、後で母に怒られてしまった。

しかし、このキャロリングのおかげで、母は安心して私を喜んで礼拝に行かせてくれるようになった。

教会は、ヒビが入って折れそうになっている心が修復される天国のような場所だと思っ

た。

そのような時は三年続いたが、洗礼を受けるまでには至らず、その間に私は結婚することになり、夫もクリスチャンではないので、それっきり教会に行くことは無くなってしまった。結婚当初は私も仕事をしていたし、夫の帰りも遅かったので、忙しきで、教会のこともすっかり忘れてしまっていた。息子が生まれてからは仕事をやめ、家事育児など目の事しか考える余裕がなくなっていた。

#### 四、人生の大転機

息子が生まれて二年経った頃、夫が名古屋に転勤になり私達は知り合いのいない土地で三人で暮らすことになった。私は育児への不安から、市内のキリスト教書店に足を運んだ。若い頃に通っていた教会にキリスト教の出版社に勤めていた姉妹がいたのを思い出したので、その時には一般の書店よりもキリスト教書店に何故か期待をして出かけた。店の人は親切に私の要望を聞いてくれて、本を探すだけではなく教会も紹介してくれたので、躊躇せずその教会を訪ねてみた。

日本バプテスト連盟 東山キリスト教会は閑静な住宅街にあるこじんまりした教会で、玉木功牧師は親身になって相談にのってくださり、帰りがけに礼拝にもどうぞと促された。私は帰宅したその日の夜、夫にその日にあつたことの詳細を順に全て打ち明けて、次の日曜日から礼拝に集っていくうちに、子育ての悩みだけではなく、今までの自分を振り返る機会になった。

バプテストマを受けたいと思うようになったのは、学びの中で、自分を縛るたくさんのしがらみから解放されていくのを感じて、イエス様を信じて歩んでいきたくなつたからだ。

その折に、玉木先生は私に「自分史を書きなさい」と言われたが、その時には書くことができなかった。バプテストマを受けるための準備が終わって、玉木功牧師からバプテストマを授けていただいた。

その頃、まだ幼稚園に入園前の息子は教会付属の「こひつじ園」に週二日、午前中の一時間、通うようになって、私は先生との連絡帳に我が家のいろいろな出来事を綴るようになった。小さいノートに度々長い文章を書いていたので、先生はそれを気に留めてくださつてか『日本クリスチャン・ペンクラブ』の集いに参加してみないか」と誘ってくださった。

その頃、理事長をされていた満江巖先生が名古屋教会で講演会をされる時に、玉木先生と共に参加させていただいた。

間もなく夫の名古屋での勤務が終わり、東京に戻る事になったので、東京の集会の案内を頂いて来た。横浜市内の社宅に住む手続きを終え、教会も社宅から通えるところで選び、やがて横浜戸塚バプテスト教会に籍を移した。

息子は、名古屋でYWCA南山幼稚園に一年半通ったが、卒園の前年六月末に横浜に転居したので卒園出来ず、やむなく半年だけ社宅近くのキリスト教幼稚園に通わせる事になった。宮の台幼稚園を卒園して小学校入学する直前に娘が生まれて、家族は四人になった。育児で礼拝に集う余裕が出来たのはそれから一年後位だった。教会生活が軌道に乗ってしばらくして、『日本クリスチャン・ペンクラブ』の定例会に出席できるようにはなったものの、数回出ただけで、日々の生活の忙しさから継続するのは無理だと判断し、残念だったが退会することにした。

横浜戸塚バプテスト教会の音楽性豊かな賛美の雰囲気の中で、私はたくさん讚美歌やプレイズソングに出会うことができ、礼拝の賛美グループにも属して、心から神様とイエ

ス様に感謝の歌声を共にできて、とても幸せな時間を過ごすことができた。

その他に、教会に来る子ども達のケアにあたる奉仕も経験して、子育てにたくさんの恵みや祝福をいただいた。そして、子ども達と一緒に賛美する喜びを噛みしめながら、日常生活も豊かにされていたと思う。

息子は小学校三年生の時にギターを習いたいと言い出した。教会で開催された賛美集会でギター演奏をする兄弟に感動したようで、それならと私は楽器屋に行った。すると、子どもに適した近くの教室を教えてくれたので教室を訪ねてレッスンに通うことにした。

息子は小学校六年の時に横浜戸塚バプテスト教会でバプテスマを受けたので、中学生の頃には教会の礼拝でもギターで伴奏ができるようになって、少しずつ自立に向かっていくような気がした。

娘は小学校五年生でバプテスマを受け、二人共、たくさん音楽を聴く機会に恵まれたので、家族の雰囲気は明るくなっていったような気がする。

東日本大震災後、苦しんでいる人達のために何か自分ができる事はないか探していた時に、ふと『日本クリスチャン・ペンクラブ』のことを思い出した。パソコンで検索し、事

務局に電話をしたら、三浦さんの懐かしい声で嬉しかった。

「ちようど創立六十周年の記念の会があるからどうぞ」と誘ってくださったので、出席することにした。

そう言えば、四十周年の記念の会に出てからずっとお会いしていなかったのだと気がついた。名古屋でお世話になった玉木先生が召天されたこともわかり、感謝を形にしたいとの思いもあつたので、退会してしまつた事を悔い、再度入会させていただいた。

創立六十周年の記念会が開催され、主からたくさんの恵みと祝福をいただいた。

千厩教会の礼拝で月一回オカリナを演奏する機会を与えられているが、日本クリスチャン・ペンクラブの例会でも、オカリナを用いて証しをする機会を与えられているのは、私にとって音楽に関わりながらの訓練の時になり、賛美歌の歴史なども紐解く時間は神様から与えられたプレゼントだと思っている。

## 愛唱聖句

\*ヨハネによる福音書七章三七―三八節

わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。

\*ヘブライ人への手紙十一章一節

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

\*ヨハネの黙示録二二章二節

川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があつて、年に一二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。

## 愛唱賛美歌

\*讚美歌二一・五一五番

きみのたまものと

\*新生讚美歌二四番

歌え 歌え キリストの愛を